

肝 炎 治療薬最前線

日本のウイルス性肝炎で最も多いのはC型、次にB型、A型となります。この中で慢性的に肝臓の炎症をおこし、長期の治療が必要となるのは、B型、C型肝炎です。(A型は慢性化することはありません。)治療は、ウィルスを減らしたり、炎症を抑えたりすることで肝硬変や肝癌への進展を食い止めることが目標となります。近年新しい薬が発売され、さらなる治療効果が期待されています。

B型 肝炎

アデホビルピポキシル

B型肝炎の治療にはウィルスを消滅させる作用のあるインターフェロンやウィルスの増殖を抑えるラミブジン療法が行われます。しかし、長期使用等により、ラミブジンの服用ではウィルスの増殖が抑えられないケースがでてきました。アデホビルピポキシルをラミブジンと併用することで、ラミブジン単独で抑えられなかったウイルスに対して効果が認められています。

C型 肝炎

ペグインターフェロン

従来のインターフェロンは週に数回通院して注射をする必要がありました。一昨年発売されたペグインターフェロンは週に1回の注射ですみ、インターフェロン単独療法の場合は治療が受けやすくなりました。しかし日本人に一番多いといわれるジェノタイプ1b型(ウィルスのタイプ)ではリバビリンの服用(インターフェロンの効果を増強する薬です)とインターフェロンの併用が治療の第一選択薬であり、頻繁な通院が続けられていました。昨年12月にリバビリンとの併用が可能なペグインターフェロンが認可され、今後この治療方法が第一選択となると考えられています。また、治療効果も頻回のインターフェロン注射に比べると高いといわれています。副作用については、体の中のインターフェロンの量が上下に変動を繰り返していた頻回打ちに比べて、発熱や悪寒などの副作用が軽減されることが言われています。

